

---

# CSI:マイアミ 青い薔薇

平安調美人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CSI：マイアミ 青い薔薇

### 【Nコード】

N8037E

### 【作者名】

平安調美人

### 【あらすじ】

火災現場から死体が発見される。疑惑の焼死体、成長が止まった子供、隠蔽された失踪、憎しみ。被害が拡大する前に、食い止める！

## プロローグ（前書き）

この物語は、「CSI：科学捜査班」のスピンオフ作品の一つ、「CSI：マイアミ」を基に作成したフィクションです。

登場人物、会社名、事件等はテレビシリーズとは全く関係ありません。

この話の登場人物の口調並びに呼び方は、吹替版を意識しています（一部で字幕版を意識したセリフもあります）

人物設定は、シーズンの設定を意識していますので、まだ見ていない方にはご注意ください。

## プロローグ

ホレイシヨ・ケイン警部補は、出勤する前に必ず墓場に向かう。そこには、結婚して半日も経たないうちに逝ってしまった若き妻が眠っている。

余命幾ばくもないとわかっていながら、残された時間を二人で過ごし、女の幸せを味わわせてあげようと誓っていた矢先に、妻は新興マフィアの凶弾に倒れた。

「まさか、今夜のディナー、すっぱかすつもりじゃないよね？」

命の灯火が最高潮になっているにも係わらず、妻はやさしく微笑んだ。薬指に結婚指輪を嵌めた左手をホレイシヨが握ると、彼女は眠るように目を閉じたまま、息を引き取った。

あれから3ヶ月、ホレイシヨは立ち直っていない。

犯罪者に対して一切容赦なく当たるが、社会的弱者には限りなくやさしいが、家族に恵まれず、愛にも恵まれていない。

これから愛すべき妻おんながいなくなつて、彼の心は砂漠のように乾いている。

これは罰だろうか？

確かに自分の右手と右頬は血で穢れている。犯罪者だけではなく、守るべき者の血までも染み込んでいる。いくら母なる海で清めても、その血は消えることもなく、また新たな血で穢れてしまふ。そんな繰り返しである。

その穢れた手で人を愛することは罪なんだろうか。

ホレイシヨは立ち上がる。守るべき者のために、弱き者のために、そして、信頼できる者のために戦い続ける。そのためなら、自分の命を引き換えても構わない。

墓の前で跪く姿勢から立ち上がり、青い瞳を隠すためにサングラスをかけてから、ハマーに乗り込んだ。

## 第1話 疑惑の焼死体

出勤してから間もない頃に携帯電話が鳴り出し、ホレイシヨはサブディスプレイを見る。内容は「701スターアイランドの火災現場から死体発見」と表示された。

オフィスからフィールドキットを取り出し、蓋を開けて中身をチェックし、机に飾っている写真に無言で問いかける。

しばらくしてからオフィスを去り、ハマーに乗り込んで現場へ向かう。

スターアイランドは高級住宅街で、その名の通り、ハリウッド・セレブや実業家などの富裕層の別荘が多い島という意味からつけられている。

マイアミは平均気温が28度の熱帯地域で冬も暖かいため、冬の間にだけ過ごすセレブたちや第二の人生を過ごす者たちが後を絶たない。

しかし、光あるところに影があり。マイアミは中南米からの玄関口と呼ばれるほど、観光客だけではなく、麻薬や違法武器が持ち込まれているため、それに絡む凶悪犯罪が後を絶たない。殺人事件でも年間200件以上、年間800人以上が殺人事件で命を落としている。全米きつてのリゾート地であると同時に、全米で十指に入る犯罪多発地帯でもある。おまけに移民コミュニティでのトラブルもあり、対処するのも一筋縄ではないかない。

ハマーが現場に到着すると、乳白色のラテックス製の手袋を嵌め、フィールドキットを携えてから、立ち入り禁止の黄色いテープをぐるぐる。

「ひどい有様だ」

体格のいい禿頭の男が口を開いた。殺人課刑事のフランク・トリップである。

「何があつた？」

「911に火災通報があり、消防作業を終えたら、リビングから焼死体を発見した」

「所有者は？」

「ジエームズ・ウエスト。マイアミ州立大学院で細胞学を研究する博士で、グラシア・コスメティック社の名誉顧問を兼ねていたそう  
だ」

「グラシア・コスメティック社といえば、知らない女がいらないほど  
だ」

ホレイシヨは焼死体の近くで片膝を折り曲げてから、姿勢を低く  
する。

「体を丸めたままになっている。よほど大切なものを抱えているか  
のようだ」

「秘書から聞くとところによると、彼には8歳の娘がいたそうだ」

「8歳か…」

悲しそうな瞳で焼死体を見る。妻が生きていれば、子供が持てる  
幸せを分かち合うはずだった。余命幾ばくもない彼女に少しでも生  
きる希望があれば、病気に打ち勝てると思った。今を思えば、彼女  
と過ごす時間を最優先にすべきだったと後悔している。

科学捜査班、通称CSIチームの主任たるものは、<sup>チーフ</sup>甘えることす  
ら許されない。一つでも気を緩めると、チームの士気に大きな影響  
を及ぼす。その所為で、科学捜査研究所（CSIラボ）閉鎖に追い  
込まれる事態が起きた。その災いの種を蒔いた者は、今では汚名返  
上のために懸命に働き、楔を終えた。

ホレイシヨは妻を亡くした悲しみを隠しながら仕事をこなしてい  
く。毎日のように起きる事件をいち早く片付けて、遺族たちに安ら  
ぎをもたらすことが、彼が生きる術である。

「俺は秘書と開発部主任の聴衆を続ける」

トリップがホレイシヨに告げてから去ると、擦れ違いにエリック・  
デルコがやってきた。

「何があっただんですか？」

「俺も今、来たところだ」

ホレイシヨが立ち上がると、

「見たところ、無理心中するために自ら燃焼促進剤を撒いて火を点けたようだ。デルコ、遺体の写真を撮って、床を調べてみてくれ」  
デルコが写真を撮って、床からサンプルを採取してから証拠袋に入れる。

しばらくして、検死官のアレックス・ウッズが現れ、遺体を調べる。

「アレックス、どう思う？」

ホレイシヨは両手を腰に当てながら、目線を低くすると、

「そうね、後頭部から背中、二の腕の一部や足の裏に3度の火傷の痕がある。子供を抱き抱えた部分にはなかった。でも、後頭部に打撲傷があるのどうかしらね？子供には火傷の痕がないわ。解剖して、死因を特定する必要があるわ」

2人の遺体をビニール袋に入れてからストレッチャーに乗せると、

「可哀相に、たった3年で天に召されるだなんて…」

「アレックス、この子は8歳だったそうだ」

「8歳ですって！？信じられない。とても3歳児の体型でしか見えないのだけど、気になることがあるの」

アレックスが子供の遺体を起こして、着ていた服の面テープを外すと、皮膚に痣のようなシミが体全体に広がっている。

「虐待されたのかしら？」

「解剖前にレントゲンとUV写真を撮って、DNAを分析に回してくれ」

「ナタリアに協力してもらおうわ」

「ああ、頼む」

アレックスが指示をすると、運搬員たちがストレッチャーを動かし、運び込んだ。

ホレイシヨがトリップのもとへ歩み寄って、ノートに目を通すと、  
「ナディア・ステイヴンスさん？」



立ち入り禁止の黄色いテープに立っている女性に声をかける。

「私は、現場検証の指揮を執っています、ホレイショ・ケイン警部補と申します。ウエスト博士の秘書をしていらっしゃるのですね？」

「はい……」

「少し質問をいたしますが、秘書になられてどのくらいですか？」

「3ヶ月と少し」

「秘書になられる前は？」

「ヨガのインストラクターをしていました。勤めていたスポーツ施設が倒産して、職を探していた時に、グラシア・コスメティックスのセールスをしていた親友に誘われて、説明会を聞いた帰りに、開発部主任から博士の秘書になつてくれないかと誘われました」

「火災が起きる前、博士に何か思い詰めたことは？」

「親友の行方を告げた後で、それから誰かと争ってきたような物音が、留守電に録音されていて……」

「よろしかったら、そのテープを提出できますか？」

「ええ、お役に立てれば……」

デルコがホレイショに呼びかけると、「失礼」と言ってからその場を外す。

「遺体の近くからこんなものを見つけました」

デルコが持ってきたのは、ガソリンの缶だった。しかし、黒焦げの上に水を浴びてしまったため、指紋が採取できない。

ちょうどその時に、ブロンドをポニーテールに結い上げたカーリー・デューケーンが現れた。

「庭に足跡を見つけたわ、凶器らしきものも」

ホレイショは推理した。博士は秘書に電話をかけている間に、侵入者によって後頭部を殴られ、ふらついた体で娘を抱き抱えて意識を失う。侵入者が博士にガソリンを撒いて、火を点け、凶器を庭に捨ててから車で逃げ去った。

「よし、分担しよう。デルコは中から、カーリーは外から調べてくれ。これはれっきとした殺人だ」

2人の遺体が検死台に乘せられた時、白衣を着たナタリア・ボア・ヴィスタがやってきた。

「アレックス、チーフから検死室へ向かうようにと指示があったけど？」

「解剖する前に子供の遺体をざっと見てちょうだい」

「ものすごい痣のようなシミがある。虐待されたのかしら？」

と言いながら、ナタリアは子供の遺体をUV写真に収める。そのことによって、肉眼では見えない痣を浮き上がらせることができる。

ナタリア・ボア・ヴィスタは、未解決凶悪犯罪、通称コールド・ケースを専門とするDNA分析官として、1年半前に赴任してきた。国に助成金を頼み込んで、ラボを改築させた張本人だが、実はFBIから送られてきたスパイだった。

予てからマイアミ・デイド署CSIがずさんな捜査をしたことで、FBIはその実態を調べてくるようにナタリアを送り込んだ。情報を仕入れるためなら、男とつきあうことも厭わなかったが、根が真面目な彼女は最後まで冷酷になれず、新興マフィアのマラ・ノーチエから押収した現金紛失事件で同僚が次々と尋問を受けてしまうことを目のあたりにして、やっと目が覚めた。そのことによって、解雇される覚悟を決めていたが、ホレイシヨの計らいによって、現場捜査官として再出発した。

同じレベル1捜査官のライアン・ウルフから叱咤を受けたり、実妹が誘拐されたり、元夫への殺害容疑をかけられたりもしたが、ナタリアは捜査官として大きく成長し、過去の汚名を返上することができた。

「それからDNAも詳しく調べてちょうだい。特にミトコンドリアDNA」

ナタリアが子供の遺体からDNAを採取し、証拠袋に入れると、  
「UV写真とDNA、何か答えがわかるかも知れないわ」

## 第2話 欲望の対価

カリーは庭で発見した足跡をカメラに収め、周辺を枠で囲んでから、石膏の袋を振る。

足跡は犯人特定に繋がる貴重な材料である。靴の減り具合、歩き方のクセ、足跡の幅などは人それぞれ違う。例えば、靴の先端が極端に磨り減っていれば、職業は長時間アクセルを踏むとラックの運転手と推測できるし、足跡の長さから計算して身長を特定することができるし、侵入口の特定もできる。

最近では靴底の形状や模様、メーカーなどのデータベースが存在しており、見えない床には静電気を起こして足跡を浮かび上がらせたりと見えない証拠を採取するための努力や工夫が欠かせない。

石膏を枠の中に流し込み、乾かしている間、カリーは凶器と思われる斧から毛髪や頭皮の一部をピンセットで摘み上げ、証拠袋に入れる。次にフィードキットから黒色粉末と刷毛を取り出して、柄に付着させ、ゼラチンテープで指紋を採取し、綿棒で擦り付ける。

一方、デルコは中から証拠を採取しようとするが、高熱の炎と水によって使える証拠がほとんどなかった。

「お手上げた」

デルコがカリーの許へ向かうと、

「そうね、使える証拠は足跡とこの斧だけ」

「じゃ、俺、ここに居る関係者から指紋とDNAと靴底を採取してくる」

「よろしくね」

デルコはハンマーに戻り、リアドアを開けると、現場近くにいる人々に証拠採取の協力を求め、指紋、DNA、靴底のサンプルを採取していく。

「今朝未明、701スターアイランドの豪邸から火災が起き、2人の焼死体が発見されました。豪邸の所有者はマイアミ州立大学大学院で細胞学を研究しているジェームズ・ウエスト博士。焼死体はウエスト博士と8歳の娘と思われ、C S Iは全力を挙げて捜査をしているところです。ウエスト博士は…」

AV分析官のダン・クーパーがテレビのニュースを見ているところをライアン・ウルフが現れ、リモコンを取り上げられる。

「おいおい、せっかくだいいところだったのに…」

ダンが愚痴をこぼすと、

「今、何時だと思ってるんだ？出勤時間が過ぎてるけど…」

「エリカが出ているのが気に食わないのか？」

ダンが言っているエリカとは、先程テレビに出ていたレポーターのエリカ・サイクスのことである。C S Iが捜査中に土足で入り込んだり、ウルフに情報を聞き出しそうしたりと特ダネを得るためなら、手段を選ばない女だが、たまに役に立つ情報を提供することもある。今ではC S Iとは腐れ縁の関係にある。

「僕が言っているのは、1週間前の失踪事件だ」

「ああ、グラシア・コスメティック社のセールスレディの」

ウルフが担当している失踪事件とは、グラシア・コスメティック社に勤務しているセールスレディが自宅から失踪した事件のことである。

彼女は塗るだけで、脂肪を燃焼してくれるクリームのセールスをしていた。

ここ半年前からグラシア・コスメティック社が販売している脂肪燃焼クリーム『ロサアスル』が爆発的に売れている。しかし、店頭販売を一切せず、セールスレディ自らが広告塔になり、顧客を増やしていた。

アメリカは『肥満大国』と言っていいほど、肥満人口の割合が高

い。特に女性の肥満人口が男性より多く、大人より子供のほうが肥満率が高い。原因は様々だが、第一に取り上げられるのが食事の量。お腹が満たされれば、味などは二の次で、ほとんどの人は料理をしないか、簡単に済ませる。日本食はヘルシーと謳っているが、コーラなどの炭酸飲料をがぶ飲みしながら天ぷらやすき焼きを多く食べ、野菜も生野菜サラダを少量で済ます。子供の頃から砂糖たっぷり、脂肪たっぷり、肉食中心で育てられたため、大人になっても変えられない。最近では肥満に関連したと考えられる医療費の増大で、健康保健の破綻が叫ばれているが、一部では太る文化への弾圧だのとか、アメリカの覇権主義だと非難している者がいる。

とはいえ、たくさん食べれば幸せとを感じるアメリカ人にとって、『ロサアスル』は魔法のクリームといったいいほどだ。塗るだけで脂肪が燃焼し、たった1ヶ月で10ポンド（約4キログラム）の体重が落ち、ウエストが2インチ（約6センチ）もサイズダウンしてくれるのだから。

セールスレディからの口コミによって、本社があるマイアミだけではなく、アメリカ全土でも顧客が増えてきている。

しかし、値段は安くない。クリームが4オンス（約112グラム）で300ドル、サプリメントが90粒で50ドル、セットで買うと250ドルであることから、肥満に悩む者にとっては高くない値段である。

それから3ヶ月、セールスレディが次々と失踪する事件が起きたが、事件性が低いため、警察は捜査していない。1週間前からウルフが担当している事件もそうだが、そう簡単に引き下がれないのは彼の性分である。

ライアン・ウルフは、パトロール巡査だった。ボストン・カレッジで化学を専攻し、卒業後は警察学校を経てパトロール巡査の仕事をこなす傍ら、夜学で遺伝学の修士を獲得した。ある事件でホレイシヨに才能を認められ、志願してCSIに転属した。仕事熱心だが、要領の悪さが玉に瑕で、周囲からひんしゆくを買われたり、エリカ

の口車に乗せられたりするが、ホレイシヨから褒められるためなら、例え地道な仕事でも手を抜かない。

ダンに頼んだのは、被害者が失踪する前に不審者がいないかどうかをチェックしてもらったためである。何の前触れもなく人間が消えることなど、分子的には不可能なことだ。イリユージョンだって、下準備があつてこそ可能になる。ウルフは失踪前に何かがあると考へ、管理人から防犯カメラのデータを押収して、ダンに分析を頼んだ。

非常口から不審者が入り、防犯カメラの視界に消えると、3分後に寝袋のようなもので担いだ不審者が非常口から出て行つた。非常口付近に証拠を残しているに違いないと確信したウルフは、フィールドキットを携えて、CSIラボを出た。

### 第3話 足跡は語る

ホレイシヨはマイアミ・デイド署に戻り、白衣を着けてから、検死室に入る。

これまで数多くの遺体をこの目で見てきた。犠牲になった者、犯罪に染まった者、世話になった者、息子同然の部下、そして愛する人。

命の輝きをなくしてしまえば、その区別もなく平等に扱われる。検死室はまさにその平等に扱われる場所としては相応しい場所である。ところ

遺体が検死台に乗せられる度に、ホレイシヨは胸が痛む。特に子供たちといった弱き者が短い生涯を閉じてしまった時、ホレイシヨは真相を確かめたいと同時に、強制的に閉じた犯罪者を許さない気分<sub>分</sub>に駆られる。

アレックスは仕事で数多くの遺体を検死し続けているが、子供の遺体には心が痛む。もしも、自分の息子や娘が遺体として検死台に乗せられたら、冷静に保てられない。

マイアミは子供においては危険極まりないところであるが、だからといって100%子供の安全を守ってくれるところがあるわけではない。そんな時勢のなか子供を守るためなら、母親であるアレックスが何をすべきなのかを考えながら仕事に励んでいる。

「死因はわかったか？」

「ウエスト博士の死因はすぐにわかった。鈍器による頭蓋骨折。3度の火傷はその後だった。でも意外なことに、そう長く生きられなかった」

「と言うと？」

「末期ガンだったのよ。尿検査で調べてみたら、マリファナの反応があった」

「博士は何かにとりつかれたようだ。確か…、トリップの説明では

…」

ホレイシヨはトリップ刑事からの説明を聞いた記憶を思い起こす。ウエスト博士はマイアミ州立大学大学院で細胞学を研究している傍ら、グラシア・コスメティック社の名誉顧問を兼ねていたことを思い出すと、アレックスが口を揃えて、

「知り合いがグラシア・コスメティック社のセールスレディをやっていたけど、1カ月前から連絡がないの。博士の死と何か関係があるのかしら？」

「それはあるかも知れんな。アレックス、8歳の娘の死因は？」

「一酸化炭素中毒死。皮膚がピンク色になっているのがわかるですよ？」

「なるほど。解剖前にレントゲンとDNAはどうした？」

「DNAはナタリアに依頼したけど、レントゲン<sup>これ</sup>を見てちょうだい。どう見ても、3歳児の骨格だわ」

「成長が止まったんだ。ミトコンドリアDNAに変異がなければいいのだが…」

ホレイシヨはすぐにナタリアの携帯番号にダイヤルを入れる。

「ナタリア、ウエスト博士の娘のミトコンドリアDNAを最優先で調べてくれ」

ホレイシヨが携帯電話の終話ボタンを押して、ポケットに仕舞い込むと、アレックスが口を開いて、

「ホレイシヨ、連絡が取れない知り合いのためにも、真相を突き止めて…」

カリーとテルコがCSIラボに戻って、それぞれの作業を始める。カリーは石膏で固めた足跡から検証してみる。

もし、スピードルが傍にいたら、何だかのアドバイスがあつたはずだと想いを馳せても、もうこの世にいない。

足跡分析を得意とするティム・スピードルは、前任チーフだったメーガン・ドナーの愛弟子だった。無情髭を生やして、無愛想でだ



らしい格好といった科学捜査官らしくない風貌をしていたが、あらゆる意味でチームを支えていた。

ホレイシヨからも信頼を寄せていたスピードルが殉職してしまったのは2年半前のことで、銃の手入れを怠ったために命を落とした。その影響でホレイシヨとデルコはどこどころで失態をしてしまう事態になったこともあった。

過去を引きずったままでは仕事にならないと、カーリーは足跡のサイズからおおまかな身長を割り出し（注1）、靴の減り方を見る。

「ねえ、デルコ、この足跡を見てどう思う？」

「先端が極端に減っている。これは運転手の足跡だよ」

「それってどういうことなの？」

「初めてスピードルと手を組んだ時に、足跡を指摘されたんだ」

それはデルコがホレイシヨからスカウトされてから間もない頃の時だった。

コンビ二強盗殺人事件の捜査で、初めてスピードルと手を組んだ時、足跡を指摘された。

先端が極端に減っているということは、長時間にアクセルなどを踏んでいる職業、つまり運転手と推定できる。

大学を卒業したデルコがポリス・アカデミーに入ると決めた時に、父親から勘当され、学費を稼ぐためにトラックの運転手をやっていた。それで足跡の先端が極端に減っていた。

デルコが過去の仕事を指摘されたことに感銘すると、スピードルは「当たり前のことをしていただけだ」と言い返した。

「なるほどね。ところで、デルコ、指紋とDNAはどっなの？」

「DNAはヴァレイラに分析を依頼した。指紋は今のところではヒツトなし」

エイフェイス

「AFIS（注2）で引っかかればいいけど、時間がかかるよね。

弾道ならすぐに結果が出るけど…」

ウエスト博士の秘書であるナディアを乗せた署内のエレベーター

がC S イラボに止まると、ホレイシヨの許へ歩み寄った。

「ケイン警部補」

「それが博士の留守電を録音したテープですか？」

「はい……」

「では、早速分析に回します。ところで博士についてお聞きしますが、何か変わった様子は？」

「わかりません」

「実は、博士はガンにかかっていたいました。研究などで思い詰めたことは？」

「……………」

ナディアは口を閉ざした。隠しているのか、言いだせないのかのどちらとも言えるかのような顔をしていた。

ホレイシヨは彼女に問うことはしなかった。彼女が答えなければ、証拠を探せばいい。

そこで別の質問をする。

「もしよければ、博士のオフィスが大学院の研究室を案内できますか？」

「はい……」

ウルフは、1週間前から失踪したグラシア・コスメティック社のセールスレディをしていたレベッカ・マーティンの自宅アパートから調べることにする。その前には非常口に対する搜索令状が必要とされるため、まずは1週間前から捜査官以外誰も立ち入っていない現場から見落としがないかどうかを調べる。

以前にホレイシヨから教えられたことがある。

誘拐はたいてい3時間以内に殺されてしまう可能性があるし、24時間以上経過するとF B Iが捜査を引き継ぐことになっている。しかし、事件性が低いという理由で捜査しないことはあり得ない。何か隠している。

ウルフは殺人を隠している可能性があるとして信じて捜査を始める。

まずは、現場を観察し、メモを取り、スケッチを描いてから写真を撮る。次にゴーグルをかけて部屋を暗くしてから、フラッシュライトを点灯した。壁、床、天井などに当てて、見えない証拠を見出す。

床に足跡を見つけると、スケールを置いてから写真を撮る。しばらくしてから緑色の繊維片を見つけ出すと、写真を撮ってからピンセットで取って、証拠袋に入れた。

期待された血痕こそはなかったが、ドアに貼り付けた指紋を採取することができた。ヘアブラシから髪の毛を抜き取って証拠袋に入れると、ドレッサーに散乱した『ロサアスル』の蓋を開ける。中身は空だった。全ての『ロサアスル』の瓶を開けると、中身が空だったことから、一瓶を証拠袋に入れた。

その時、携帯電話が鳴った。ウルフが応対すると、トリップ刑事が非常口への搜索令状が発行してくれたとの連絡が入った。

ホレイシヨはナディアの案内で大学院の研究室へ入ると、ドアが少し開いていることに気づいた。

ナディアに中へ入らないように指示すると、腰のホルスターからシグ・ザウエルP229を抜く。

中に入ると、何者かによって荒らされており、呻き声が耳に届くと、

「おい！しっかりしろ！」

男が床で倒れているのをホレイシヨが見つけると、

「こちらC S Iのケインだ。救急班を頼む」

携帯電話で救急班を呼んだ。

### 第3話 足跡は語る（後書き）

注1：小林・岡田計算式によると、 $82.50 + 3.53 \times \text{足跡長}$ （センチ単位）で身長（センチ単位）を推定できる。

注2：自動指紋照合システム。指紋をデータベース化したもので、1983年に日本の警察庁が初めて導入された。現在ではアメリカ・カナダ・韓国などの十数カ国の警察で導入されている。

## 第4話 怒りの矛先

「ゴドノフさん?!」

ゴドノフと呼ばれた男がストレッチャーに運ばれると、ナディアは絶句した。

ホレイシヨが「彼は？」と訊くと、ナディアはグラシア・コスメティック社の開発部主任のミハイル・ゴドノフ博士と答えた。

ナディアをウェスト博士の秘書としてスカウトした科学者で、『ロサアスル』の危険性を訴えていたという。開発部主任でありながら、『ロサアスル』をやめさせるようにと訴えていたのか、ホレイシヨは疑問を抱いた。

記憶が正しければ、CSIが捜査に乗り込んだ時には、ゴドノフはナディアの傍にいたし、服や靴が汚れていない。もし彼が犯人だったら、証拠を残しているはずだ。

次にウェスト博士のオフィスにいた理由。もしかしたら、『ロサアスル』の危険性を世間に知らせるために資料を探していたかも知れない。もしそうなら、何者かによって襲撃されたことも合点がつく。

地球にある元素で有害にならないものがない 大学時代（注1）に学んだものの一つである。それはどんな元素も組み合わせによって毒となりうることを指しており、薬品も同じことが言える。

FDA（アメリカの厚生省）はそれを承諾しているのか？

薬品というものには、必ず副作用がある。だが、『ロサアスル』には副作用が発表されていない自体がおかしい。グラシア・コスメティック社は何かを隠している。それを明らかにするには、まずは証拠を集めなければならない。

ホレイシヨは携帯電話でカリーとデルコにウェスト博士のオフィスから証拠を採取するようにと指示を与える。

ゴドノフの命に別状はなく、治療医から尋問の許可をもらうと、

ホレイシヨはナディアとゴドノフに尋問を始めた。

「ゴドノフさん、貴方はグラシア・コスメティク社の開発部主任でありながら、『ロサアスル』の危険性を何故ですか？」

ゴドノフは口を閉ざした。開けば、命がないと思い込んでいるかのようだった。

「無理に話さなくてもいいが、貴方が証言してくれなければ、被害が拡大するかも知れない」

「あの、ケイン警部補」

ナディアが口を挟むと、

「親友がグラシア・コスメティク社のセールスレディをしていて、1週間前から行方がわからなくて」

「何ですって!？」

「今でも捜査は続いていますか？」

「残念だが、それはお答えできない」

「でも、ケイン警部補。親友が殺されたかも知れないのに、警察はやはり役所の…」

「ナディア、これにはちゃんとした理由があるんだ」

警察が失踪事件の捜査がすることができるのは事件発生から24時間で、それ以降はFBIが受け継ぐことになっていると説明した。

FBIが誘拐並びに失踪事件の捜査に乗り込むことができるのは、1932年にチャールズ・リンドバーク（注2）の息子が誘拐され、70日後に遺体として発見されるという悲劇的事件を教訓にして制定された『連邦誘拐法』によるものである。

アメリカでは失踪事件は深刻な社会問題になっている。その被害者の数は年間100万人以上、そのうち子供だけでも70万人以上にもなっている。（注3）

「ケイン警部補、この怒りをどこにぶつければいいのですか？こうしている間でも親友が…」

「約束する。君の親友を必ず助け出してやる。それで名前は？」

「レベッカ・マーティン」

ホレイシヨはその名前に聞き覚えがあつた。1週間前にウルフが捜査を担当した事件の被害者の名前だった。化粧品会社のセールスレディをしていたが、何の化粧品なのかわからないまま、捜査を打ち切り、FBIのMPU（失踪者捜査班）に委託しざるを得なかった。

1週間経つてもレベルカが見つからないということは、生存するかどうか判らない状態になっている。事件発生後48時間以内に失踪者が見つからなければ、生存している可能性が低くなる。それにも関わらず、FBIは何をやっているのか。

ホレイシヨは改めてFBIのやり方に強い憤りを抱いた。今度会つてきたら、必ず追求してやると。

その時、ホレイシヨの携帯電話が鳴り出すと、「失礼」と言いながら、病室から出た。

「ホレイシヨだ」

「ライアン・ウルフ。レベルカ・マーティンの自宅アパートの非常口から、繊維片を見つけました」

「指紋やDNAはどうした？」

「犯人は手袋をしていて、指紋やDNAは採取できませんが、足跡を見つけました」

「それで変つたことは？」

「先端が極端に磨り減っているのがあつて。犯人の中に運転手が含まれているかも」

「これは誘拐事件だな。繊維片と足跡を分析に回せ」

通話が終わり、終話ボタンを押してから、携帯電話を仕舞うと、ナディアが「何か？」と訊いた。

「君の親友は、誘拐された。犯人は恐らくグラシア・コスメティックス社の者だ」

「ケイン警部補、実はあのテープに、レベルカが助けを求めているものが含まれているけど……」

「それは1週間前の何時でしたか？」

「夜の10時ぐらい。レベッカが必死に助けを求めていると同時にグラシア・コスメティック社の管理部と名乗る男の声が…。もしかして、あの人たちがレベッカを誘拐したのでは？」

「ナディア、よく聞くんた。君はグラシア・コスメティック社から目を付けられているかも知れない。実家でも身内の家でもいいから早く安全なところへ移った方がいい」

「お気遣いはありがとうございます、親友の安否がわかるまでここにいます。そしてゴドノフさんと一緒にグラシア・コスメティック社と戦います」

「一つ、約束したいことがある」

ホレイシヨはポケットから名詞を取り出して、ナディアに手渡すと、

「ほんの些細なことでもいい。何かあったら、この番号に連絡するんだ。いいね？」

「ありがとうございます、ケイン警部補」

「私のことはホレイシヨで結構です」

「カーリー」

フィールドキットを携えて、ウェスト博士のオフィスに入ると、デルコはカーリーに声をかけた。

「過去に何度か、ダイエットを試したことはある？」

「数え切れないほどよ。日本食とか、リンゴだけだとか、ゆで卵だけとか…」

『弾丸ガール』の異名を持ち、ホレイシヨに匹敵するほどの正義感や根性を持っているカーリーでも、いざ仕事から離れると、アルコール依存症の父親に手を焼いたり、おしゃれを楽しんだり、どこにでもいるような女性とは変わりない。

ダイエットに励まなくても充分美人なのになりたい気持ちを抑えながら、デルコは証拠を採取する。

10分経って、カーリーがウェスト博士のデスクに1枚の写真を見



つけると、

「デルコ」

「何か見つかった？」

長いブラウンヘアーに青い瞳をした白人の少女の写真だった。かなり昔の写真なのか、ところどころで色褪せているところがあり、服装もフリルがついている。

カリーは昔の記憶を呼び起こそうと目を閉じる。

彼女の頭の中から、ある歌が思い出す。

” S o m e w h e r e . . . ”

ミュージカル仕立ての映画、三つ網に結ったブラウンヘアー、エプロンドレス、そして『虹の彼方へ』…

カリーが昔見た映画の記憶が歌と共に蘇える。そして、ブラウンヘアーの少女の名前も。

「パトリシア・アンダーソン」

「パトリシア・アンダーソンって？」

カリーが呼吸を整えてから歌の一説を歌いだす。

” S o m e w h e r e . . . ”

デルコが何か思い出したかのような口調で、

「ああ、『虹の彼方へ』」

「オズの魔法使い。ドロシー役で人気を博した子役。8年前から消息を絶っているけど…」

「何かスキャンダルでもあったのか？」

「何度かカムバックを試みたけど、失敗続き。一部では子供を下ろしたとか流産したとかで、あまりいい噂を聞かないし」

「詳しいんだね？」

「Y染色体にはゴシップが存在しないの」

「そんなものかな？」

「そんなものよ」

と言いながら、カリーとデルコが床を見下ろすと、紙に踏みつけた跡が見つかった。

「デルコ」

「先端が極端に減っている。同一犯の仕業かな？」

「写真を撮って、ラボで比較してみましよう」

#### 第4話 怒りの矛先（後書き）

注1：ホレイシヨはマイアミ州立大学で化学の学士号を取得したという設定になっている。

注2：1927年に大西洋単独無着陸飛行を成功した有名な飛行士。

注3：CSIシリーズと同じジェリー・ブラツカイマー製作総指揮のドラマ「WITHOUT A TRACE / FBI 失踪者を追え！」に、アメリカ本国の放送時や公式サイトにて実際に失踪した人の情報を求めるコーナーを設けていたり、牛乳パックなどに失踪者の写真を掲載したりと、様々な形で情報を呼びかけている。

## 第5話 隠蔽された失踪

ホレイシヨが病院から出て、C S エラボに戻ると、ナタリアがUV写真を手にしてやってきた。

「チーフ」

「この写真は？」

「虐待されたかどうか、UV写真を撮ってきたけど、それらしき痕が見当たらなかった」

「それはメラミン色素によるシミだな。ところで、ミトコンドリアDNAはどうなった？」

「骨から採取して、精製しているところ」

ナタリアからの説明を終えると、ホレイシヨはUV写真をジッと見つめる。誰かに似ている。もし、写真の子供が成長すると、どんな顔になっていくのか。

以前、弟のレイモンドが潜入捜査中に知り合ったスージー・バーナムの一人娘、マディソン・キートンの顔を見て、ホレイシヨは一発でレイモンドに似ていることに着目して、ヴァレイラにDNAをこっそり調べさせた。共通するアレルがあったことから、マディソンはレイモンドの子であることがわかった。

これは妻イエリーナに対する裏切り行為だ。

ホレイシヨは弟に憤りを抱いた。予てから想いを寄せていたイエリーナを弟に譲り、二人の幸せを祈りながら、自分の想いを封印してきた。

一人息子に恵まれ、幸せそうに見えたが、潜入捜査中に他の女と知り合い、その上妊娠させていたとは。

今さら血を分けた姪までを責めるわけにはいかず、自分が弟の代わりとして面倒を見ようと思うようになった。だが、そのことが裏目に出て、イエリーナに誤解を与えてしまった。

怒ったイエリーナはホレイシヨに何かと嫌味を言う内務調査部の

リック・ステトラーとつきあい始め、亡き夫を忘れようと努力した。全ての誤解が解けるのに1年以上もかかり、潜入捜査中に命を落としたはずのレイモンドが麻薬取締局に転属するために偽装工作をしていたことを知ったホレイショは、ある組織から弟一家を守るために、証人保護プログラムでブラジルへ行かせた。

ブラジルで再出発し、静かな生活を送っていたはずの弟一家は、レイモンドが勝手に潜入捜査を始めた時からギクシャクし始め、ホレイショが妻の仇を追って訪ねてきた時には、レイモンドは帰らぬ人となり、同じ名前を持つ息子も悪の道へ引きずられる寸前のところでホレイショに助けられた。

イエリーナとレイ・ジュニアがマイアミに帰ってきたのは、ごく最近のことであり、イエリーナは仕事を探している最中だとジュニアから教えてくれた。

その一方、マディソンは、急性骨髄性白血病で入院生活を送っており、最近では適合するヒト白血球型抗原（HLA型）の提供者が見つかり、移植手術を受けたものの、回復する兆しが見られていない。

ホレイショはあの時の勘を頼りに、ウェスト博士の娘の写真を見ている。

しばらくして、ナタリアに写真を借りてもいいのかと尋ねると、承諾してくれた。

AVラボに足を運び、分析員のダンにUV写真からのシュミレーションを最優先に頼む。

シュミレーションソフトを起動し、スキャナで写真を取り組むと、ダンは顔のパーツに手を加える。

頭や目が大きく、鼻と口が小さい子供の写真が、成長するにつれて、顔が長くなり、額の面積が狭くなり、鼻が大きくなることによつて、眉間と額の落差がつけられる。

顎のラインががっしりと形成され、円らな瞳が横長になり、口も大きくなる。

こうして完成された顔にホレイシヨは目を凝らした。見れば見るほどに誰かに似ている。

目を閉じて、記憶をたどってみる。

先程、病院で会った、ウエスト博士の秘書のナディア・ステイ・ヴンスに似ている。

もし、そうならば、ミトコンドリアDNAを調べる必要がある。

ミトコンドリアDNAは母親のみから受け継がれるもので、変異がなければ、100年間保てられる。

ミトコンドリアDNAの配列が一致すれば、血縁関係がわかる。

もし、ナディアとウエスト博士の娘の配列が一致すれば、二人は姉妹であることがわかる。

ナディアからDNAを提供できれば、事件解決への鍵が見つかる。問題はナディアがそれを承諾してくれるかどうか。

ホレイシヨがラボに止まらず、現場で走り回るのは、時間が経つにつれて、証拠能力が低くなることを懸念してのことである。これはかつて刑事を勤めていた時の勘である。

科学捜査官においては無駄なことだと思うが、単に証拠を分析するだけでは、解決に繋がらない。証拠というものは物であって、犯罪を行うのはあくまでも人間。人間の行動があつてこそその証拠で、一秒でも間違つと、後に影響を及ぼす。

よく人から「犯罪者に対して一切容赦がない鬼捜査官」とか、「事件解決のためなら例え上層部でも噛みつく」などと言われるが、それは犯罪によって泣かされている弱者たちを助けるためであつて、自分の出世などは二の次である。そのためなら、自己犠牲を厭わない男。それがホレイシヨ・ケインである。

完成された成長写真がプリントアウトされると、ホレイシヨはAラボを出る。

その時、トリップがホレイシヨの許へ訪ねてきた。

「ホレイシヨ、まずいいことになった」

「どうした？」

「ウルフが証拠を持ち帰ろうとした時、FBIが介入してきた」

「MPU（失踪者捜査班）か？」

「主任のカーライル捜査官が見えているんだ」

「わかった」

ホレイショがマイアミ・デイド署のロビーに向かうと、ショートヘアのブロンドに赤いスーツを着た40代ぐらいの女が立っていた。FBI失踪者捜査班の主任捜査官であるマチルダ・カーライルがホレイショの姿を見かけると、

「ケイン警部補」

「カーライル捜査官」

「1週間前に失踪したグラシア・コスメティック社のセールスレディのことを再捜査していると聞いていたが……」

「荒らしに来たのか？」

「確かに我々は地元警察から嫌われている存在だが、いがみ合ってばかりは先は進まない」

FBIは州を跨いだ連邦犯罪に対しては逮捕権があるが、起訴権がない。そのため、地元警察に干渉することができるが故に嫌われている。だが、そういがみ合ってはいられない。

グラシア・コスメティック社のセールスレディの数は、アメリカ全土で500万人を突破し、その大半が『ロサアスル』を勧めている人が多く、使用者のほとんどは肥満に対するの悩みを抱えていた。3ヶ月前からセールスレディが失踪しているにも関わらず、FBIは未だに捜査を進められていない。

時間が経つほど、生存している可能性が低くなり、最悪の場合は既に死んでいて、闇に葬られることだってある。

FBIが手を出せないという自体がおかしく、ホレイショは強い憤りを抱くが、カーライル捜査官は「だから貴方方地元警察から少しでも情報を提供してもらいたい」と頭を下げた。

「規則に触れるのはわかっている。私だって、15歳の娘がいる。娘は痩せる必要がないのに、『ロサアスル』を買ってほしいとせが

んできた。私が反対すると、娘は『そんなに頑固だから、パパから愛想を尽かして離婚を申し出たのよ』と家出したつきり、帰ってこない。私が間違っているのだろうかと自問自答を繰り返しながらこの仕事に取り込んでいる」

「そうか。だが、貴女は間違っていない。『ロサアスル』の魔の手から娘を守りたかった。ただ、それだけのことだったのだろうか？」

「その通りよ、ケイン警部補。愛する人を心配しない者は……」

マチルダがふとホレイシヨの亡き妻のことを思い出した。

「奥さんのことは風の噂で聞いた。それはお気の毒に」

「義弟がマリファナを購入した件は？」

「それも聞いたわ。確かにマリファナは四大麻薬の一つとして国際問題化されているが、ガンに苦しむ人たちにとっては矢も得ないことも。だが、犯罪は犯罪。それを敢えて自分自ら背負っている。貴方は本当に自分に執着を持たないのね」

「それが俺の宿命だ」



## 第6話 憎しみの遺伝子（前編）

カリーとデルコがラボに戻ってくると、ウルフが駆け寄ってきた。  
「やばいことになった」

駆け寄ってくるなり、ウルフが口を開くと、カリーが「どうしたのよ？」と訊いた。

「1週間前に失踪したグラシア・コスメティック社のセールスレディの再捜査で、FBIが圧力をかけてきたんだ」

「どうして勝手なことをするのよ？」

「それにはちゃんとした理由がある。ノナルド叔父さんが世話になっているスポーツクラブのインストラクターの親友がグラシア・コスメティック社のセールスレディだったんだ」

「それが1週間前に失踪した人というの？」

「そういうことだ。マイアミでもグラシア・コスメティック社のセールスレディが次々と失踪して、行方がわからないんだ。もしかしたら、殺されているかも知れない」

「チーフに相談したの？レベル1の捜査官が勝手に捜査したら……」

「俺が許可した」

ホレイシヨが二人の会話を割るように口を挟むと、

「チーフ、許可を得たって、いつ頃ですか？」

デルコが質問すると、

「FBIは3ヶ月前からグラシア・コスメティック社をマークしている。セールスレディが次々と失踪していることに不審に思い、1ヶ月前に令状をとって捜査に乗り込んだが、収穫がなかった」

「何か圧力をかけられていることは？」

「恐らくある。だからFBIは自らの非を認め、我々に協力を呼びかけてきた」

「全く、呆れた」

カリーが呆れた顔で言った。

「とにかくチーフがそう言うなら、その化けの皮を剥がしにいきましよう」

その時、ホレイシヨの携帯電話が鳴り出した。

「ホレイシヨだ」

「ホレイシヨ」

受話器の向こうの声は、トリップ刑事だった。

「ナディア・ステイヴンスが不審車に追突されたと通報があった」  
「彼女は無事か？」

ホレイシヨがハマーで駆けつけると、ナディアはストレッチャーに乗せられて、救急車に運ばれようとした。頭には包帯で巻かれていた。ホレイシヨは救命士にバツジを見せると、ナディアに最初の供述をとっておく。

それによると、ナディアは病院から車で自宅まで戻ろうとした時に、一台の銀色の車が後をつけてきて、振り切ろうとしたが、追突された。

ホレイシヨは救命士に被害者が何か話し始めたら、それを覚えておくようにと依頼し、ナディアに代わりの捜査官を病院で迎えられるように手配しておくと言うと、救急車の扉が閉まって、出発した。  
「ナタリア、今すぐERへ向かって、ナディア・ステイヴンスから指紋やDNAの採取を頼む」

ホレイシヨは携帯電話でナタリアに指示を与えると、カリィとデルコに現場へ向かうように指示を与えた。

駆けつけてくる間に、トリップは制服警官とともに現場を確保し、部外者を立ち入れないように配慮する。立ち入りテープが現場周辺を囲むと、カリィとデルコがテープをくぐろうとした時、レポーターのエリカ・サイクスが情報を得ようと近づいてきた。

「相変わらず早い登場ね」

カリィが嫌味たっぷりな口調で言うと、エリカはウェスト博士の秘書がグラシア・コスメティック社には知られたくない秘密を握っ

ているのではないかと思つて、後をつけてきたと言い返すと、

「前にも言つていたけど、テレビに顔出しばかりしてないで、新聞記者の仕事をちゃんとしなさいよ。もし命を落としてしまったら、花でも供えてあげるわ」

エリカは悔しそうな顔をしながら睨みつけると、デルコは無視してカリーにテープを揚げた。

「大丈夫か？」

ホレイシヨがカリーに声をかけると、

「平気よ。そんなのとづくに慣れてる」

カリーはフィールドキットから乳白色のラテックス製手袋を嵌めて、タイヤ痕の写真を撮る。デルコはナディアの車を見る。ナディアの車は日産のマーチのアイリツシユクリーム。後部に銀色の塗料が付着している。デルコは写真を撮ってから塗料を証拠袋に入れた。ホレイシヨは運転席からドアを開いて、エアバッグを調べる。

エアバッグは車が衝突するとセンサーが反応し、センサーユニットに信号が送られる。そこからエアバッグモジュールに信号が伝わって、インフレーター内でガスを発生させて、エアバッグが瞬時に膨らむ。この際、収納部の一部が押し破られて開き、完全に膨らしたら、直ちにガスが抜けてエアバッグが収縮する。

その時の衝突で顔面の打撲や擦り傷などの軽症を負う場合はあるが、ステアリングやダッシュボード、あるいはフロントガラスに頭から突っ込むよりはマシであるし、急激な気圧の変化で鼻血が出たり鼓膜を傷めたりする場合もあるが（注）、これも怪我の程度をより軽くするためには仕方がない。

例えばエアバッグが標準装備されていても、一旦作動させると交換に多額の費用を必要とする。これはエアバッグ本体のみならず、センサーユニットまで一式の交換が必要なためであるので、仕方がない。

ホレイシヨは考えた。ナディアは自宅へ帰る途中に、一台の不審車に後をつけられ、別のルートを通つて、避けようとした。だが、

しつこくつきまとわれて、もうダメかと思った時に、車が追突されて、ハンドルのセンターパッドが押し開かれてエアバッグが作動した。幸い彼女はシートベルトを装着していたために、怪我は軽く済まされた。

これはグラシア・コスメティックからの警告なのか？

ホレイシヨはグラシア・コスメティック社を訪ねてみる必要があると判断した。

ナタリアがERに入ると、受付でナディア・ステイヴンスのことを訊く。一般病棟の相部屋に収容されていると返答をもらうと、主治医に捜査に必要な証拠を採取するための許可を申し出る。主治医から5分以内に行うようにと許可をもらうと、ナタリアは初めてナディアと対面する。

ナタリアは息を飲んだ。ある女性の面影が、一瞬にして蘇えっては消えた。

「ナディア・ステイヴンスさん、私はCSI捜査官のナタリア・ボア・ヴィスタ。ケイン警部補からの代理として、貴女から証拠を取らせていただくことになったの。ちょっとしんどいかも知れないけど、犯人を捕まえるためには必要だから、我慢してね」

ナタリアは、看護師に包帯を取るようにとお願いすると、看護師はナディアから包帯を取り、ガーゼを取る。生傷が残っている頭部に写真を撮り、新しいガーゼで傷口を当てて、包帯を巻き直す。その間にナタリアはナディアから指紋を採取して、フィールドキットから綿棒を用意した。看護師が包帯を撒き終えると、ナタリアは綿棒でナディアの口内液を擦り付けてから、キャップに収納する。

「ご協力に感謝します」

ナタリアはナディアに挨拶すると、看護師はナディアを寝かしつけた。

ホレイシヨはトリップと共にグラシア・コスメティック社本社へ

向かった。本社ビルはマイアミのオフィス街の中にあり、周辺には数多くの美容整形クリニックが建っている。受付ロビーで待機すると、社員たちは赤毛の男にチラリと見ていた。

確かにホレイショ・ケインは、赤毛にサングラスと仕立てのいいスーツがトレードマークである。サングラスはオーストリアのシルエット社のチタニウム・モデル8568で、スーツはヒューゴ・ボスカプラダといったブランドスーツ。これは科学捜査班主任としては欠かせないアイテムで、特にサングラスは、紫外線だけではなく凶悪犯から心を覗かせたくないがためには極めて重要なものである。どちらかといえば、女性が好まれる顔をしているが、男から見ても充分に魅力的だ。

女性社員からヒソヒソと話し声を耳にするが、捜査には必要のないものばかりなので、あえて無視している。

ホレイショはどちらかといえば、フェミニストである。女性には紳士的に接し、なおかつ懐が深い。自分から女性を振ることはほとんどない。だからと言って、ロマンスがなかったわけではない。

例えば、義妹のイエリーナ・サラスとは、レイモンドと結婚する前から想いを寄せていながら、弟の幸せを最優先にして自ら身を引いてきたものの、今でも密かに想いを寄せているような素振りを見せており、州検事のレベッカ・ネヴィンスとは部下を亡くした心の傷を打ち明けていながら、ある事件で司法取引を巡って、ご破算になり、裁判で知り合ったばかりの弁護士スベードルのレイチェル・ターナーは、ホレイショに恨みを持つ凶悪犯に殺され、デルコがマリファナを買うきっかけを作った姉のマリソルは、ホレイショが同情を寄せていくうちに恋が芽生え、結婚に漕ぎ着けたものの、新興マフィアによって、短い生涯を閉じてしまった。

自分のことより、他人のことを最優先に考えるホレイショは、元々愛に恵まれていない、哀しい男である。マリソルを亡くした今でも、ずっと心に突き刺さっている。

受付係が社長との面会の許可の連絡をすると、ホレイショはトリ

ツプと共に社長室へ足を運んだ。

第6話 憎しみの遺伝子（前編）（後書き）

注：鼓膜が破れる場合もある

## 第7話 憎しみの遺伝子（中編）

ホレイシヨとトリップが社長室へ入ると、執務机で女がパソコンのディスプレイを眺めていた。

「警察の方だとお伺いしましたが…」

女が老眼鏡を外すと、ホレイシヨは目を疑った。

結い上げたブラウンヘアに抜けるような白い肌に青い瞳。誰かに似ているような顔だった。

「私はグラシア・コスメティックCEOのエリザベス・アンダーソンと申します」

エリザベスと名乗った女が二人の警官に握手を求めると、

「マイアミ・デイド郡署のフランク・トリップとホレイシヨ・ケイン。実は一言では申し上げにくいかと思いますが…」

「どうぞ遠慮なく」

「一つお聞きしたいのですが…」

ホレイシヨが口を開くと、

「グラシア・コスメティック社は、無店舗、広告宣伝は一切なし、『ロサアスル』一品だけで、セールスレディを通じて顧客を増やしている。そもそもその『ロサアスル』という物は、いったいどういうものでしょうか？」

「そうね、『ロサアスル』が店頭で一切販売していないかと申しますと、効きすぎるからです」

「効きすぎるとは？」

「『ロサアスル』は、我が社の名誉顧問でもあるウエスト博士が、某製薬会社からの依頼で開発した肥満治療薬を化粧品向きに応用したものです」

「それはFDAから認可されているのでしょうか？」

「もちろんですと、ミスター・ケイン」

エリザベスの説明を聞くとところによると、セールスレディの管理



の下でしか『ロサアスル』を購入することができない。そのためには、セールスレディが自ら広告塔として、3ヶ月の研修と称して『ロサアスル』とサプリメントとのセットを購入して体験しなければならない。

ホレイシヨはこの女が言っていることに胡散臭さを感じた。

まず問題はFDAからの認可が下りているかどうか。

アメリカは日本のように健康保険が利かず、国民が支払う医療費が非常に高いため、日頃から健康補助食品などを摂取して、自らの健康管理に努めている。

FDAによる治験・審査承認体制は日本の厚生労働省薬務局より大きく上回り、栄養学においても20年先も進んでいる。それにも関わらず、FDAは未だに一般流通では出回っていない『ロサアスル』を認可したのか。

次に値段が高価すぎる。『ロサアスル』とサプリメントのセットを3ヶ月で購入すると、5500ドル。もちろんクレジット契約も可能である。ちなみにCSIレベル1捜査官の年収は3万4500ドルぐらい。1年通して購入すると、年収の3分の2。ブルーカラー労働者でも手に届きにくい値段である。

これはピラミッド商法のひとつだとホレイシヨは思った。

1930年代にアメリカでマルチレベル・マーケティング（MLM）の誕生とほぼ同じ時期に生まれた問題商法で、商品を介して参加者から集めた膨大な資金を上部組織が分け合う権利金ビジネスのことを指しており、消費者自身が販売員も兼ねるディストリビューター方式を採用するMLMとは似て非なるものである。

だが、ホレイシヨとトリップが訪ねたのは、ウェスト博士とグラシア・コスメティックス社との関連を訊くためで、ビジネスの内容を訊いているわけではない。

そこでホレイシヨは万が一のことを訪ねることにする。

「それでもし、効果が現れなかったら？」

「万が一あったとしても90日間全額返金保証がつきますし、痩せ

てる方にも維持できるプログラムも用意してあります。貴方方の周りで肥満にお悩みの方やスタイルを維持されたい方がいらっしゃいましたら、こちらまでお電話ください」

とエリザベスがホレイシヨとトリップに名刺を渡す。

「他に何か質問は？」

「今日のところはそれで結構です。後ほど改めてお伺いします」

ホレイシヨはトリップと共にグラシア・コスメティック社を去ると、

「ホレイシヨ、本題とは全く違った質問するのは何故なんだ？」

ホレイシヨがトリップの肩をポンと置きながら、これは揺さぶりをかけるためのジャブに過ぎないと言いつ返した。

証拠をいち早く保存することも大事だが、犯罪は人間が行うものである。第一に令状がなければ指紋やDNAを採取することができない。残されているものは、聞き込みだけ。ホレイシヨは本題から外した聞き込みを行ったのは、相手からの反応を知るためである。「確かに、今の段階ではグラシア・コスメティック社とウエスト博士との関連は表面的に過ぎないからな」

「フランク、俺の勘なのだが、CEOのエリザベス・アンダーソンの顔、見覚えがあるだろう？」

「そういえば……」

フランクは事件が起きてからの記憶を断片的に思い起こす。ブラウンのショートヘアに青い瞳、抜けるような白い肌をした女の顔が一瞬にして浮かび出ると、

「ウエスト博士の秘書のナディア・ステイヴンスに似ているな」

「それで思ったんだ。ナディア・ステイヴンスとエリザベス・アンダーソンは、血が繋がっているかも知れない」

「そういえば、ナタリアに指紋やDNAの採取を頼んだと聞いたが？」

その時、ホレイシヨの携帯電話が鳴り出した。

「失礼」

トリップに断ってから、通話ボタンを押す。

「ホレイシヨだ」

「たった今、ナディア・スティーヴンスから指紋とDNAを採取した」

電話の発信元は、ナタリアだった。

「彼女の爪も採取したか？」

「ミトコンドリアDNAのことね」

「これからERへ向かう。ナタリアは大至急、DNAの分析を頼む」  
「了解」

ホレイシヨが携帯電話の終話ボタンを押してからポケットに仕舞い込んだ。

カリーとデルコはCSIラボに戻って、ウエスト博士のオフィスから採取した証拠品とナディアの車を衝突した車の塗料片とタイヤ痕に分析を始める。

まずはウエスト博士のオフィスから採取した指紋と足跡。指紋はウエスト博士の自宅の庭に残した凶器の指紋と一致、足跡も庭に残されたものと一致した。

次にナディアの車を衝突した車の塗装片。車の塗装の違いから車種の特定が可能だと言われている。塗装は下塗り、中塗り、そして上塗りの三層で成り立っており、車種や型式や部位によってどの塗料を使うかが決められていると言われている。例え同一車種でも生産時期によっては塗料を変更する場合もある。

主に塗料片を調べることができるのは、赤外線を照射して吸収率の違いを見せる赤外線吸収スペクトルや走査型電子顕微鏡による断面の観察、顕微鏡に付随するエネルギー分散型マイクロアナライザーなどの塗料の元素分析を行う。これを基にして該当する車種からの光沢や肌触りなどを確認する。

しかし、最近では下塗りに密着技術が高まり、ライトを覆うカバ―も強化プラスチックが主流となって、衝突する際に塗装片が落

ちなくなったり、車種を異なっても同じ塗料を使うことにあるため、捜査が難しくなった。

手品師には必ずトリックが必要だと同じように、科学捜査にも証拠が必要としている。

そこでデルコは現場から採取したヘッドライトの破片から車種を調べる。

最近の技術で、盗難車を追跡する目的で導入されたデータドット・テクノロジーがある。それは微細な円盤の中にレーザーでIDを焼きつける技術で、接着剤で車の部品につける。部品に刻印されたIDが特定できれば、車両に辿り着く。

データベースで調べてみたところ、メルセデス・ベンツCLS550が昨日に盗難届が提出されたことが判明した。

後はホレイシヨに追跡システムの許可をもらうだけだ。

## 第8話 憎しみの遺伝子（後編）（前書き）

（本編においての注意）

物語の進行上、分析結果などを短縮しています。

## 第8話 憎しみの遺伝子（後編）

ホレイシヨはトリップと別れて、ERへ足を運んだ。

医者から5分程の面会の許可をもらうと、早速ナディアに話しかける。

「大丈夫か？」

「ごめんなさい。貴方からの忠告を聞いていなかったために、こんな目に遭ってしまつて」

「君は悪くないんだ。悪くないんだ…」

そう言いながら、ホレイシヨはナディアを気遣う。

「ホレイシヨ、ナタリアだったのかな？ 貴方の代わりに指紋とDNAを採取しに来た捜査官は。最初からはつきり言っておけばよかったのかしら？」

「何のことだ？」

「ウエスト博士の娘のことだけど、私に似ているのでしょ？」

「ああ…」

「調べてもらわなくてもわかるかと思うけど…」

「あの子は妹だったと言うのか？」

「できれば、母のことを話したくなかったけど、ベッキーがいなくなつて、ウエスト博士が死んで、ゴドノフさんが襲われて、そして私までも…」

「ナディア、ウエスト博士が『ロサアスル』の素である肥満解消薬を開発するようになったきっかけは、君の母親との出会いだと思うんだ。だから、君の母親のことを知りたい」

「私の母は、パトリシア・アンダーソンという女優で、4歳の頃からモデルを経て、11歳の時に『オズの魔法使い』というミュージカル映画でドロシー役で人気を集めた」

「父親は？」

「わからない。恐らく映画プロデューサーか制作会社の社長か。彼

女が女優として成功するために誰かと寝て出来た。私を産んだ時は14歳だった」

ナディアの話を聞いた時、ホレイシヨは少女モデルを死に追いやった母親のことを思い出した。(注1)

モデルとしての成功を押し付けられるのを嫌がった少女は、山中で足を滑って頭を打たれ、ヒルに血を吸われて命を落とした。少女の体内にはペッサリーが入っていた。それを入れたのは母親だった。堅物では成功できないからと言って、娘にペッサリーを入れた。結局母親を裁くことができないが、浮き沈みが激しい芸能界やモデル業界で成功するためには身体を売ってもいいものかと強い憤りを抱いた。(注2)

ナディアの母親であるパトリシア・アンダーソンも然りだが、彼女一人だけで娼婦の真似事など出来るわけではない。彼女の背後に母親の影があると思うようになった。

「君が生まれてからどうしたんだ？」

「ハリウッド(注3)の里親(注4)に育てられた。自分が里子であることを気づかないほど、愛情を一身に受けた。でも、ある日、自分がパトリシア・アンダーソンの娘だと知って、里親に頼んで会わせてもらった。13の時だった。生まれて初めて人を憎んだのは……」

1997年、L・A・にあるサウスビーチ。

13歳のナディアは、養母と共に、実母のパトリシアを訪ねてやってきた。

自分はもらい子であることはわかっていた。別に育ててくれた親を恨んだり、憎んだりはしなかった。ただ、自分を産んだ母親はどんな人なのか知リたかったからだけだった。

いざ、会ってみたら、自分が思い描いていた母親のイメージとは、全くかけ離れていた。

抜けるような白い肌、愛くるしい顔、細い手足。だが、失望する

のに時間がかからなかった。

間近に見たパトリシアはビックリするほどの厚化粧で、目元には粉がたまってひび割れてきた。むくんだような、たるんだような、張りのない肌。

撮影の準備が整えるまでの30分間、パトリシアはメイク係によつて何度も粉をはたいてもらい、何度も目元を直してもらった。

助監督が「時間だ」と言うと、パトリシアはすぐに立ち上がって撮影に臨む。その時、付き人が機転を利かせてナディアに娘だと紹介して何か一言言ったらどうだと言うと、

「冗談じゃないわ。私に子供だなんて」

「それ以来、パトリシアを心底憎むようになった。自分の子供を愛せず、容姿と人気のことばかりしか考えない醜いブタだと」

ナディアは10年前のことを打ち明けると、ホレイシヨは「そうだったのか」と同情の眼差しで言い返した。

「でも、あの時の養母は私を責めずに抱きしめてくれた。その時の温もりが身に染みて、胸が張り裂けてしまうそうだわ」

「そうか」

「ところで、貴方にご家族は？」

「俺は家族を失った。愛する人と巡り会えて、これからだという矢先に失った」

「辛いのか？」

「ああ、今も、とても辛い」

「ごめんなさい。気を悪くしてしまって」

「こちらこそすまなかった。話は変わるが、ウエスト博士が開発した肥満解消薬というのは？」

「それはゴドノフさんに聞いていただければよろしいのでは。彼がかつてウエスト博士の教え子だったとか」

「わかった。ありがとう」

ホレイシヨはナディアとの面会を切り上げて、医者にゴドノフの



病室を訊いた後で、一旦表を出て、携帯電話の電源を入れる。

留守電メッセージを聞くためにダイヤルを押そうとしたその時、着信音が鳴り出した。

「ホレイシヨだ」

「チーフ」

電話の向こうの声はデルコだった。

「ナディア・ステイヴンスの車を追突した車種を特定できました。メルセデス・ベンツCLS550。ヘッドライトの破片から調べてみたところ、昨日に盗難届が提出されたものと一致しました」

「車両班に連絡して、追跡してくれ」

「了解」

「それから、近くにカリーはいるか？」

「いますか？」

「代わってくれ」

受話器の向こうでデルコがカリーに携帯電話を渡している様子が耳に届くと、

「もしもし」

「カリー、パトリシア・アンダーソンという女優に関する情報をゴシップからでもいいから、出来るだけ多く。それからグラシア・コスメティックス社との繋がりも調べてくれ」

「了解」

ホレイシヨは終話ボタンを押して、電源を切ると、病棟に戻った。

CSIラボ内にあるDNA分析ラボでは、ナタリアが採取したウエスト博士の娘から採取したDNAの分析結果が出た。ほとんどの核内のDNAのほとんどが死滅されているが、ミトコンドリアDNAだけは辛うじて残っていた。ミトコンドリアDNAは核内のDNAに比べて、数が多く、なおかつ検査しやすいのが特徴で、1個の細胞内で500から1000個ぐらいに存在している。両親からの遺伝情報を受け継ぐ核内DNAに対して、ミトコンドリアDNAは

母親から受け継ぐ。子供のミトコンドリアDNAの遺伝情報は突然変異以外は母親と同じ配列のため、それを比較することで親子関係や先祖の調査が可能となる。

後はナディアの口内粘液から採取したDNAを精製し、ウェスト博士の娘と比較するだけである。

一方、ウルフはレベッカ・マーティンの自宅アパートから証拠として持ち帰った『ロサアスル』を綿棒で採取し、試料分析をかける。薬物の捜査では、可能な限り早く乱用薬品かどうかを判定するために必要な予備検査と確認検査が不可欠となっている。

予備検査では試薬と反応させて呈色反応を見る。メタンフェタミン（覚せい剤）にはシモン試薬（炭酸ナトリウムなど）、モルヒネやアヘンにはマルキス試薬（硫酸とホルマリンの混合液）、コカインにはチオシアン酸コバルト試薬（コカイン試薬）、大麻にはデユケノア試薬が使われているが、LSDを検出する試薬は今のところ存在していない。予備検査で呈色反応を見た後で、裁判の証拠となる確認検査と続く。

確認検査ではガスクロマトグラフィーなどの科学的分析を経て、赤外吸収スペクトルや質量分析法が行われる。ガスクロマトグラフィーによって物質ごとの吸着性や溶解性の差をグラフ化にし、質量分析計によって明確に成分の定量を行って、薬物の名を決定する。

分析結果がプリントアウトされると、ウルフは目を疑った。

## 第8話 憎しみの遺伝子（後編）（後書き）

注1…「CSI：マイアミ」シーズン1第11話「吸血の森」の少女モデル失血死事件のこと。

注2…アメリカでは児童劇団や養成所などが存在しないため、組織によるバックアップは皆無。そのため売れる前に親の打ち込みによって、子役の将来が決まると言われている。

注3…フロリダ州南東部、ブロード郡に位置する都市

注4…ナディアの里親は当時パトリシアの付き人を務めた者の遠縁に当たる。

## 第9話 失くした愛

デルコは車両班との協力を得て、ナディア・ステイヴンスの車を追突した車両を追跡する。

レーザーで刻印されたヘッドライトのIDから現在地が特定された。サウスイースト1番街と2番街の交差点駐車場で車両を発見すると、デルコは破損されたヘッドライトとタイヤに写真を撮り、フロント部分から後部へ足を運ぶと、トランクが少し開いているのを見つけ、上げてみる。

男がくぐもった声で助けを呼んでいる。デルコが「しっかりしろ！」と声をかけて、ベルトから無線機を引き出した。

「こちら、C S Iのデルコ。救急班を頼む」

ホレイシヨはゴドノフがいる病室へ向かうと、

「ゴドノフさん、話はナディアから聞きました。ウエスト博士のゼミナールをとる学生だったと」

「その通りです、ケイン警部補。同年代でありながら、博士号を5つも取得した天才だと尊敬していた。だが、あんな危険な薬を作ることにはこだわった原因は、『パトリシア・アンダーソン』にあると思っていた」

「その危険な薬というのは、『ロサアスル』の素となった肥満解消薬ということですか？」

「『ロサアスル』は催奇性がある。元はと言えば、12年前にウエスト博士が製薬会社からの依頼を受けて開発したものだった。私たち夫婦もその治験に参加した」

「奥さんは？」

「妻は同じ大学の同級生だった。私たちは貧しくてもお互い頑張れば、何とか乗り越えられると信じてきた」

ミハイル・ゴドノフは、ロシア人の父親とキューバ人の母親との間に生まれ、幼少時に家族と共にキューバから亡命してきた。両親からの援助を受けて大学に通い始めたが、同級生でロシア系キューバ人のアナスタシア・ナザーノフと知り合い、結婚したことで勘当された。

生活は貧しかったが、2人で力を併せて頑張っていけば、何とかできるとひたすら信じてきた。

12年前、生活費を稼ぐために、夫婦はウエスト博士が開発した新薬の臨床テストのバイトに応募した。ところが始まってから10週目に入った時、多くの治験者が副作用が出始めた。全身に広がる斑点、激しい炎症、中には組織が壊死した者がいて、実験は中止になった。

ゴドノフ夫妻には副作用は免れたが、DNAに影響を与えられたことを知らぬまま、妻のアナスタシアは妊娠し、出産した。生まれた子供の体には全身痣だらけになっており、生後3カ月で成長が止められたまま、2カ月後に命を落とした。将来を悲観したアナスタシアはアルコールに溺れ、肝硬変でこの世を去った。

残されたミハイルは、ウエスト博士に問い詰めたが、相手にしてもらえなかった。同じような症例が出た者が存在したのにも関わらず、その事実は製薬会社と大学側によって揉み消されていた。

真相を知るために、卒業後は製薬会社に就職し、新薬の開発に貢献しながら、肥満解消薬の研究をした。

それから8年、ボストン大学で勉強するために製薬会社を退職した時に、グラシア・コスメティックス社からスカウトされ、再就職した。理由はウエスト博士がグラシア・コスメティックス社の名誉顧問になっていたことだった。

開発部主任として製造に携わりながら、社内の女性と関係を結び、動向を調べさせていた。そんな中でセールスレディ説明会に参加していたナディア・ステイヴンスと出会い、ウエスト博士の秘書としてスカウトした。

「ナディアを秘書として紹介したのは、ウエスト博士に近づくためだった。博士はすごく気難しくて、秘書が次々と辞めてしまう。ナディアに声をかけたのは、パトリシア・アンダーソンに似ていたからだ。それがナディアの過去の傷を穿り返してしまった」

「全ては復讐のためですか？」

「ケイン警部補、貴方に奥さんは？」

「私も家族を失った。その気持ちはよくわかる」

「私はあの悲劇を繰り返すのを阻止したいだけ。それが復讐と捉えていてもいい。もし、復讐を遂げたとしても、失くした愛は戻らないのはわかっている」

ゴドノフの話を聞いていくと、ホレイシヨは妻のことを思い出し  
てしまう。

彼女は余命幾ばくもないことをわかっていながら、ホレイシヨに甘えてばかりでいた。ホレイシヨもホレイシヨで彼女に同情していた。そのためならどんな我が儘でも受け入れることを厭わなかった。「もし私が死んでも、ずっと忘れないで」

マリソルから結婚を申し込まれた日の夜、ホレイシヨは初めて彼女の肌に触れた。青白い顔を赤く染め、切ない息遣いを繰り返す彼女を丹念に愛撫を施し、自分の進りを放つ。今思えば、これが最初で最後の情事だった。

「もし神様が時間を延ばしてくれるなら、赤ちゃんを産んでみたいの。その赤ちゃんが貴方に似ていたらいいのにね」

マリソルのささやかな願いは、一発の凶弾によって碎かれた。それでも彼女はホレイシヨにやさしく微笑みながら、予定していたイタリアンレストランの名前を言った。

「まさか、今夜のディナー、すっぱかすつもりじゃないだろうね？」

結婚指輪を嵌めた左手を触れながらホレイシヨが言うと、マリソルは眠るように息を引き取った。その時、ホレイシヨの青い瞳から涙が潤い始めた。

神よ、何故？

涙がポタリと落ちて、仕立てのよいスーツを汚す。

「マリソル、もう少しだけ俺の傍で生きてほしかったのに」

白いハンカチで涙を拭った後、義弟に連絡を入れた。

妻と子供を亡くしたゴドノフの悲しみと妻を亡くした自分の悲しみとは違うが、一度失った愛はもう戻れない。

だが、ブラジルでその一線を越えてしまった。義弟を助けるために矢も得ないことだったが、殺人は殺人だ。地元警察から咎められたとしても。

「ケイン警部補、ケイン警部補」

ゴドノフの声でホレイシヨの意識が現実の世界へ戻された。

「まさか、奥さんのことを思い出したのでは？」

「すまない」

「ケイン警部補。私が生きているとわかっていたら、何を仕返しされるかわからない。証人保護プログラムを適用できないのかと」

「それは懸念だが、犯人を逮捕するのにはナディアや貴方からの協力が必要だ。知っている限りでいい。証拠になれるものがあつたらこちらに連絡を」

ゴドノフに名刺を渡すと、ホレイシヨは病室を後にすると、ストレッチャーで運ばれている男の傍らでデルコの姿を見かけた。

「デルコ、その男は？」

「盗難車を追跡したところ、トランクに閉じ込められたところを助けました」

「車は？」

「押収しました」

「顔の傷を見たか？」

デルコはトランクから引き上げた時の記憶を辿ってみる。男の口には粘着テープで塞がれたことを除けば、傷一つもなかったことを思い出すと、

「とりあえず、指紋とDNAを採取して、車を調べろ」

ホレイシヨはデルコに指示を出すと、ERを出てハマーに乗り込んだ。

CSIラボに戻ると、ウルフが分析結果を携えてやってきた。

「チーフ、失踪したレベッカ・マーティンの自宅から押収した『ロサスル』の分析結果が出ました」

「その成分は？」

「水、ミネラルオイル、グリセリン、水酸化ナトリウム、トリエタノールアミン、パラペン。そして注目しておきたいものは、チロシンの他に、DNPとANP」

「DNP ジニトロフェノール は主に染料や防腐剤、爆薬などに使われている。かつてはダイエット薬品として使われたことがあった」

「もしDNPが体内に取り込まれたら？」

「人体の新陳代謝を活性化してエネルギーを熱に変える効用がある。しかし長期間、大量に使い続けると、体内の熱で臓器が溶け出してしまい、そして死に至る。DNPが劣化するとANP アミノニトロフェノール に変質する」

「念のためにセットとして購入しているビタミン剤を分析してみたところ、体内に必要なビタミンは検出されませんが、エフェドリン（注）とカフェインが検出されました」

ホレイシヨは思った。グラシア・コスメティックス社の欲望の前では、個人の悲しみなどを利用して、顧みる価値はないものかと。

ならば戦うしかない。例え相討ちになったとしても。



## 第9話 失くした愛（後書き）

注：咳止め薬の成分。メタンフェタミン（覚せい剤）の原料にもなっている。かつてはこれを使ったダイエット薬品<sup>エフェドラ</sup>が出回ったが、高血圧、脳卒中、心筋梗塞などの副作用があったために、FDAや日本の厚生労働省からの勧告により、ほとんどの国では使用を禁止されている。（現在でもエフェドラフリーとしてドラッグストアなどで売っているが、エフェドリンの危険性などを排除したためものなので、効用はそれほどでもない）

## 第10話 命あるかぎり

一夜が過ぎて、ホレイシヨがC S エラボへ向かおうとした時に、  
カリーに声をかけられた。

「おはよう」

「おはよう、収穫はどうだ？」

ホレイシヨが言った収穫とは、パトリシア・アンダーソンのこと  
であり、パトリシアに関する情報を収集するように頼まれたカリー  
は図書館から借りてきた過去のゴシップ誌やネット上でのゴシップ  
などを集めてきた。

「出勤時間まで余裕があるけど、一緒に朝食をとらない？」

「いや、結構だ」

「チーフ、お腹が空いていたら戦ができないわ」

「わかった。君の誘いに乗るよ」

ホレイシヨが参ったように言うのと、カリーは心の中でガッツポ  
ーズを取りながら、近くの食堂へ誘った。

ホレイシヨはトーストとハムエッグにオレンジジュースを、カリ  
ーはグリッツ（粗挽きとうもろこしのお粥）と生野菜サラダにコー  
ヒーを注文すると、話を始める。

「まずはパトリシア・アンダーソンのプロフィールから」

「1970年3月10日生まれ、カリフォルニア州サンフランシス  
コ出身、4歳の頃からモデルとして芸能界に入り、11歳で『オズ  
の魔法使い』のドロシー役を演じて人気を集める。それ以降、数多  
くの映画に出演したが、16歳の頃に出演するはずのハリウッド大  
作映画のクランクイン直前に降板したことで業界内外でバッシング  
を受ける。何度かカムバックを試みるが、失敗に終わり、8年前か  
ら忽然と姿を消し、現在でも生死不明 となっているわ」

「生きれいれば、37になっているということか……」

「おはよう、今日は珍しいわね？警部補と一緒に朝食を共にするだ

なんて」

ウェイトレスのイザベラがオレンジジュースが入ったピッチャーとグラスを持ってやってくると、

「ちよつとね、仕事に取り掛かる前の打ち合わせ」

「仕事熱心だね」

「仕事熱心はチーフのことよ」

「それで何の打ち合わせ……って、これ、パトリシア・アンダーソンの写真？」

「知っているの？」

グランドハウス

「お祖父ちゃんが昔、映画館（注1）を経営していて、私が映画を見に行っても咎められなかったの。最前席で大人しく座っていたからね。（注2）そこでB級ホラーとか日本のやくざものなどを見てきたけど、パトリシアが出演した映画も覚えてるわ。ちようどビデオの普及で閉館する直前のことなんだけど……」

イザベラが一人でベラベラと話している時に、ホレイショは数多くの雑誌を取り出して、ページを捲る。ある写真には目を皿にして、またある写真には無視するなどの繰り返しをしながら、必要な情報を引き出そうとする。その時、ある写真に目を止めると、

「カー」

「どうしたの、チーフ？」

「ダン出勤なのか？」

「休みじゃないけど……」

「ゴドノフが証言したとおり、俺たちが追っている事件の背後には、失踪した女優にある。だが、所詮は虚像に過ぎず、黒幕は身近に存在する」

朝食を済まし、CSIラボに出勤すると、ホレイショはAVラボを訪ねる。ダンに写真を拡大するように言うと、手慣れた調子で写真が拡大されていく。荒くなった画像に画素数を増やして、鮮明にしていくと、ある事実が気づく。

ホレイシヨは確信したように笑みを浮かぶと、携帯電話が鳴り出す。

「ホレイシヨだ」

「ホレイシヨ、ハイアリア市の食品加工工場で、レベッカを保護したとの連絡が入ったの」

受話器の向こうのナディアを宥めながら、A Vラボを抜け出して、駐車場へ向かう。

ハマーに乗り込み、一通りの対応を済ますと、F B Iのカーライル捜査官の携帯番号を押す。

「カーライル捜査官、ホレイシヨだ。たった今、レベッカ・マーティンが食品加工工場で保護されたとの連絡が入った」

デルコは出勤早々から分析ラボで、昨日に採取した指紋をA F I Sで照合してみる。

日本で最初に導入したこのシステムは、アメリカや韓国などの多数力国の警察で採用され、数多くの指紋データが登録されている。

しかし、データベースに引っ掛かっても、必ず事件に結びつくとは限らない。指紋やD N Aだけでは、陪審員たちを説得するのは難しい。

犯人を有罪にする<sup>ホシ</sup>ことには、いくつかの証拠が必要。C S I捜査官は、ただ証拠を採取して、分析をすればいいわけではない。どのようにして証拠を残していったのかを推理しなければならない。それらの証拠を基にして犯人を特定し、逮捕に導く。後は証拠品を裁判に提出し、証言しなければならない。

採取した指紋がデータベースに引っ掛かる。引き出された情報によると、グレコリー・ヤング、カリフォルニア州で窃盗罪の前科があった。

データがプリントアウトされると、デルコはD N Aラボへ足を運ぶ。

「ヴァレイラ、昨日、車のトランクに閉じ込められた男のD N Aは

？」

考え事をしていたのか、分析員のマキシヌ・ヴァレイラが我に返った様子を見せながら、デルコの質問に答える。

「ウエスト博士の自宅に侵入した犯人のDNAと一致した」

「それが、グレコリー・ヤング？」

ヴァレイラにファイルを見せようとすると、デルコは彼女の顎に小さなシミができているのに気が付く。

「ヴァレイラ、最近何かしている？」

「顎のラインが気になって、友達の勧めで『ロサアスル』を使い始めたけど？」

「首筋に小さなシミがある」

「えっ、まさか！？」

ヴァレイラがDNAラボを飛び出し、化粧室へ向かおうとすると、ぐらつと目眩がしてきて、そのまま倒れた。

「ヴァレイラ、ヴァレイラ、しっかり！」

デルコが起こそうとした時に、カリリーが通りかかる。

「カリリー、救急班を！」

食品加工工場にハンマーを止めると、ホレイシヨはサングラスを外して、受付で用件を告げる。社員の案内でオフィスに向かうと、毛布をかけた女性 レベッカ・マーティンがいた。

ホレイシヨは被害者の目線を合わすように跪く。これは相手に威圧感を与えず、なおかつ信用を与えるための方法である。警察官というのは、対応によっては市民の敵にも味方にもなれる。ホレイシヨは常に相手の目を見て話している。言葉だけでは相手に伝わらない。そのためにはサングラスを外して相手を見る。

初めて見たレベッカは、ウェーブがかかった黒髪に黒い瞳をしており、かさついた白い肌には、シミが広がっていた。

これがウエスト博士が開発して失敗に終わった『ロサアスル』の副作用だったのか。

こみ上げる怒りを押し殺しながら、レベツカを尋ねる。

「君がレベツカ・マーティンさん？」

「貴方は？」

「ベツキー、ケイン警部補なの。貴方を捜してくれると約束してくれたの」

ナディアが説明すると、レベツカが顔を横に向きながら、

「私の姿を見て、こう思っているでしょうね。そら見たことかって」

「何言っているのよ。死ぬほど心配してたわ」

ナディアはレベツカをやさしく抱き締めた。

「ありがとう、ナディ。貴女のアドバイスを聞いていなかったら、今頃は……」

抱き合っている二人を見て、ホレイショは女性たちの夢を粉々に砕いた悪魔を野放しにしてはいけないと思った。必ず尻尾を捕まえて、止めを刺してやると。そのためにはFBIとの協力と証拠が必要だ。

今のところは決定付ける証拠が揃っていない。だが、証人はいる。レベツカの存在こそが『ロサアスル』の功罪を世に知らせる数少ない証拠である。

間もなくして、FBIのカーライル捜査官がやってきて、事情を説明した。

## 第10話 命あるかぎり（後書き）

注1…アメリカでB級低予算の暴力・ホラー・エロスで満ちた映画を上映する映画館のこと。大抵は2、3本上映されていたが、1980年代に入ってからビデオの普及によって、次々と閉館された。

注2…アメリカでの映倫は5段階になっている。

## 第11話 黒幕の正体

ナタリアは病院に運ばれたヴァレイラがやり残していた作業を終えて、デルコに報告する。

「何かあった？」

「ヴァレイラがやり残していたことね？ ウェスト博士の自宅に侵入した男のDNAと車のトランクに閉じ込められた男のDNAが一致。でも、CODISコーティス（注）に登録されたデータから、カリフォルニア州で恐喝罪で逮捕歴がある男がヒットしたの。ミッチェル・ヤング」

ナタリアがミッチェル・ヤングのファイルをデルコに見せると、

「グレコリー・ヤングと瓜二つ、一卵性の双子だな」

「ミッチェルとグレコリーは、我々の追及を逸らすためにナディア・ステイーヴンスが運転するニッサンマーチをぶつけて、事件に巻き込まれたのを装ってグレコリーを車のトランクを閉じ込めたようね」

「でも、何故わざわざこんな小細工を？」

「とにかく車の中を調べましょう」

その時、カリリーがやってきて、

「ヴァレイラの容態は？」

デルコが声をかけると、

「大事には至らなかつたけど、許可をもらってロッカーから『ロサスル』とビタミン剤を取り出して、分析にかけたの」

「それで？」

「昨日、ウルフが分析していたものと一致したの。でも、アメリカ全土で『ロサスル』を使用している者がこれだけたくさんいるのに、副作用が報告されていないのがね」

「もしかしたら、グラシア・コスメティック社が顧客を増やすために副作用を隠していたのでは？」

ナタリアが口を挟むと、デルコが口を開いて、

「そもそも医薬品やサプリメントは数々の検査や治験に合格しなけ



ればならない。もちろんFDAからの認可を受けないと市場に出回らない。でも、FDAがこんな危険なダイエット薬品を認可することはないことだけだ」

「車のトランクに閉じ込められた男はわかったの？」

「カリーが問いかけると、デルコはAFISでヒットした男のことを言うと、

「その男から取り調べましょう」

レベツカが救急車に運ばれるのを見届けてから、ホレイショは署に戻る。ラボに入ろうとすると、内務調査部のリック・ステトラーが近寄ってくる。

内務調査部とは、警察内の部署の一つで、警察官が犯罪組織から買収されたり、違法な逮捕の有無などを調べる、いわゆる警察の中の警察組織のことである。それに所属するリック・ステトラー巡査部長は、かつてはホレイショと昇進試験で競い合っていた縁があった。ステトラーが近寄ってきているということは、今の事件に何か問題があるのかと思われる。

「ホレイショ、グラシア・コスメティック社のセールスレディの1人を捜していると聞いていたが？」

「たった今、ERへ運ばれた」

「なんだって！？ということは、見つかったというのか？」

「自力で脱出したと証言している。それに食品加工会社から該当する保養施設を教えてくれた」

「乗り込むつもりか？」

「あの失踪事件はFBIの管轄下にあるので、我々は別件でグラシア・コスメティック社を捜査しなければならない」

「ホレイショ、悪く言うつもりはないが、グラシア・コスメティックから手を引け」

「リック、そいつは人の面を被った吸血鬼だ。己の欲望を満たすために弱き者から生き血を吸って、法の目から逃れて生きている。今

更引く訳にはいかん」

と言いながら、ホレイシヨはその場を去った。

「ダン」

ＡＶラボへ向かって、ダンを訊ねる。

「ナディア・スティーヴンスから預かっていた留守電テープはどうした？」

ダンが留守電テープをデジタル変換すると、

「ナディ、やっぱりあんたの言う通りだったわ」

電話の主はレベッカ・マーティンだった。切羽詰まったような口調でナディアに訴えている様子が伝わってくる。

「『ロサアスル』は異常よ。シミがどんどん増えていく……」

その後、玄関チャイムを鳴らす音が耳に届いた。

「レベッカ・マーティンさん、グラシア・コスメティック社管理部の者ですが……」

しばらくして、レベッカの悲鳴と同時に留守電が切れる。

「1月16日、午後10時5分です」

音声メッセージの後で、次のメッセージが流れる。

「ナディア君、私だ。君の友達の居場所を教えてやろう。キー・ウエストにある通称保養センターと言われる所だ。そこには副作用が出た者を隔離する場所だ。ごく軽度の症状が出た者は所定の治療で完治できるが、君の友達は手遅れだ。恐らく薬物などを投与されて病死に見える方法で殺されるだろう。それから『ロサアスル』の本物のデータは私のオフィスの金庫に保管されている。万が一のために君に遺産を相続するようにと弁護士に依頼しておいた。最後に君に教えておく。君の母親パトリシアの母親は、グラシア・コスメティック社の……」

ウエスト博士の悲鳴が耳に届くと、留守電が切れて、

「1月23日午後11時48分です」

と、音声メッセージが流れた。

ホレイシヨは留守電メッセージが2つの事件の証拠となりうると

確信した。

「ダン、カリーが持ってきたパトリシア・アンダーソンの過去の記事を分析できたか？」

「先ほど終わりました」

ダンはパソコンのディスプレイの前に座って、パトリシア・アンダーソンの写真を表示した。その写真にはウエスト博士と一緒に写っていた。ホレイショは注意深く写真を見ると、背後に何か写っていることを気づいて、ダンに写真を拡大し、鮮明に表示するようにと指示を与えると、

「それが黒幕の正体が…」

見覚えのある顔に思わずニヤリと笑みを浮かんだ。

カリーはトリップと共にERに向かうと、ヤング兄弟がすぐに走り出し、車に乗り込む。

すぐさま車のナンバーを記憶して、カリーは無線で応援を呼んだ。ヤング兄弟の車が法定速度を20マイル（およそ32キロ）オーバーして逃亡する。パトカーがサイレンを鳴らしながら追跡する。

逃亡車が6・25マイル（約10キロ）先までの交差点の信号を無視して突進すると、右から進入した車に後部をぶつけられて、スピーンしながら電柱にぶつかった。

制服巡査がパトカーから降りて銃を突きつけて包囲すると、ヤング兄弟は観念して車から降りた。

手錠をかけられ、パトカーに乗せられて、マイアミ・デイド郡署の取調室へ入れられると、

「貴方たち、一卵性の特性を生かして、上手く逃れたかも知れないけど…」

カリーがそう言つと、

「足を見せて」

ヤング兄弟が仕方なく机に足を乗せる。

「両方とも先端が磨り減っている。貴方たちは2人で1つの犯行を

重ねた。ウェスト博士の自宅に残された足跡とDNAが一致すれば、  
刑務所行きとなるわ」

カリーが証拠写真とDNA分析データを見せる。

「博士と娘を殺害しただけではなく、ゴドノフ博士と秘書を危害に加えたのも貴方たちでしょう？」

ゴドノフを襲った凶器から採取した指紋の写真とメルセデス・ベ  
ンツに付着した塗装片の写真を見せると、ヤング兄弟はショックを  
隠せなかった。

「誰に頼まれたのか、詳しく教えてちょうだい」

ホレイシヨはウルフを呼び出して、ウェスト博士のオフィスへ向  
かった。未だに解除されていない黄色いテープを潜り抜け、ウルフ  
に金庫へ案内すると、

「ウルフ、トリップから聞いたところによると、君の叔父さんが金  
庫破りだったと？」

「僕が11の時に叔父さんから教わったんです」

「君の腕を見込んで、金庫を開けてほしいんだ」

ウルフはラテックス製の手袋を嵌め、扉に耳を当ててダイヤルを  
回す。慣れた手つきでロックが解除されていく。最後のロックが解  
除すると、

「チーフ」

「開けたか？」

扉を開くと、表紙に”TOP SECRET”と表示された書類  
とA6サイズのノートが置かれてあった。

## 第11話 黒幕の正体（後書き）

注：DNA記録システム

## 第12話 残された良心

2日後、グラシア・コスメティック本社は、禿頭の警察官の出現で、受付が騒然となった。

「マイアミ・デイド郡署のトリップだ。社長のエリザベス・アンダーソンに面会を願いたい」

「あつ、はい、しばらくお待ちください」

受付社員が内線電話をかけると、

「社長、警察の方がご面会に…」

内線を受けたエリザベスが青ざめた様子を見せながら聞き入れると、

「社長、今すぐこちらへ」

秘書の誘導で非常口を通って、社外へと出たその時、

「お出かけかな？」

ホレイショが仁王立ちで待ち構えていた。

「エリザベス・アンダーソン、署までご同行を願う」

エリザベスをパトカーに乗せ、署内での取調室まで案内すると、ホレイショとトリップが証拠ファイルを携えて入る。

「私に何の容疑でかけられたのか知らないけど、まずは弁護士を通してちょうだい。これからテレビ局からの取材があるので」

「それは延期してもらった。貴女にかけられた容疑は、殺人教唆と誘拐罪だ」

ホレイショが証拠ファイルから通話記録を取り出して、エリザベスに見せる。

「2日前にグレゴリー・ヤングとミッチェル・ヤングを殺人、同未遂、並びに誘拐罪で逮捕した。ヤング兄弟はグラシア・コスメティック社の運転手だが、これは表向きで、本業は評判を落とさないために雇われた札付きの悪党<sup>ワル</sup>だった。主に『ロサアスル』を使って副作用が出た者を誘拐し、キー・ウェストの保養施設まで送り込む役

割を与えた。場合によっては貴女の手足となって悪事を働いた。兄弟の通話記録から貴女の携帯電話番号が記録されている。ウエスト博士を殺すように指示を与えたのは貴女だ」

「ウエスト博士は我が社の名誉顧問なのよ。いろいろダイエットを試しても挫折した私を救ってくれた恩を仇で返すだなんて、馬鹿げているわ」

「それは説明会で『ロサアスル』を使わすための決まり文句。だが、調べはついている」

次にトリップが口を開く。

「組合（注）に問い合わせてみたところ、38年前に上演したミュージカルで主役に抜擢されたにも関わらず、興行的に失敗したことがわかった。その後、地方公演で食い繋いだが、3カ月後に体調不良で降板した」

「その時、貴女は妊娠し、時が満ちた頃に娘を出産した。その娘こそが8年前に芸能界から忽然と姿を消したパトリシア・アンダーソン」

ホレイショがパトリシア・アンダーソンの写真を見せる。長いブラウンヘアに青い瞳、愛くるしい顔と抜けるような白い肌。見れば見るほどに、エリザベスに似ていることがわかる。

「貴女は娘に将来をかけた。彼女を女優として成功するためには、手段を選ばなかった。かつて貴女が関係者に体を提供したように、娘にも強要した。そして14歳でパトリシアは娘を出産した。マスコミの追求から逃れるために、貴女は孫娘を当時の付き人の遠い親戚に養子を出した」

「出鱈目を言っと、名誉毀損で訴えてやるわ」

「孫娘の出生証明書と養子縁組の手続きを証明する書類が証拠だ。娘の存在を知らないパトリシアは、数多くの映画に出演を経て、ハリウッド大作映画の主役の一人に抜擢されたが、クランクイン寸前に降板した」

「10代半ばのパトリシアが、1人で降板するとは思えないわ」

2日前にラボの近くにある食堂で、朝食を摂っている時に、カリ  
ーがそう言った。

「ただでなくても、子役から大スターになること自体が難しいのよ。  
もし大作で主演して、多額のギャラが入っても、自分のものにはな  
れないし、それを巡って、両親が争いを起こして離婚するし、当の  
本人は酒やドラッグに溺れてしまうことが多いのよ」

「パトリシアも誰かの援助がなければ動かない傀儡の1人のようだ。  
その黒幕は父親か母親のどちらかだ」

「DNAを比較できるサンプルがあればいいけど…」

「それは既にある」

「当時のゴシップ誌で、パトリシアの降板で裏を引いたのは貴女だ  
という記事がある。裏付ける証拠がないが、貴女なら監督などに口  
出しすることは充分にありえる」

「そんなものは私でなくても、大多数の子役の親たちだってそうよ」  
「それを境にパトリシアは過食症になった。何度かダイエットを試  
みたが、失敗に終わった。そんな時に出会ったのがウェスト博士だ  
った」

ホレイシヨはウェスト博士とパトリシアと一緒に写っている写真  
をエリザベスに見せる。

「これは12年前に博士のスポンサーだった製薬会社のパーティーで  
撮影されたものだ。その当時のパトリシアは25歳だった。その出  
会いを裏で引いたのは、言うまでもなく貴女だ」

写真の背景を拡大して、鮮明にした写真を指で示すと、  
「貴女は博士が開発中の肥満解消薬の存在を知り、娘を実験に参加  
させた」

ホレイシヨはA6サイズの手帳をエリザベスに見せる。

「博士のオフィスの金庫から、『ロサアスル』のデータと共に日記  
を押収した。その日記にはパトリシアのことが記されていた。それ



によると、彼女は開発が止まっても使い続け、博士は薬を与え続けたと書かれていた。そうなくなってしまった時には既に遅く、パトリシアは薬を使うのをやめられなくなった。人気が落ちる一方で、何度かカムバックを試みても失敗に終わり、その度に過食と薬の服用を繰り返して、彼女の肉体も精神もボロボロになり、8年前に博士の娘を出産したと同時に死亡したと日記は終わっていた」

「すごい想像力ね。私はそんな退屈な空想小説につきあっている暇はないわ」

「ウエスト博士の娘がパトリシアの娘であることは、ミトコンドリアDNAで証明されている。パトリシアにはもう1人の娘が存在している。貴女の会社で勤務している者だ」

ホレイシヨはパトリシアのもう1人の娘の写真を見せると、エリザベスは一瞬にして凍りついた。

「ウエスト博士の秘書として雇われたナディア・スティーヴンスが、パトリシアが14歳で出産した娘だ。ナディアから採取したミトコンドリアDNAの配列が一致した。もし貴女のミトコンドリアDNAを調べれば、血縁関係もわかってくるだろう」

エリザベスは言葉を失った。

「一つ教えてくれ。娘を死に追いやった貴女が、『ロサアスル』を世間に広めたのは何故だ？」

「それは決まっているじゃない。一度『ロサアスル』の効果を知った女が例え副作用が出て危険だとわかっていても、細い手足のほうを望むのは当然よ」

「そんな基準を誰が決めた？ 痩せれば健康で美しいとも思っているのか？ 最後に教えておく。例え刑事裁判で無罪になったとしても、FBIの追求と民事訴訟からは免れまい。巡査、手錠を」

手錠をかけられたエリザベスはホレイシヨに睨みつけながら巡査に連行された。

翌日、ホレイシヨはウエスト博士と娘の葬儀に参列した。参列者

の中にはナディアやレベツカ、そしてゴドノフがいた。

牧師が天に召される者に対しての言霊を述べ、2つの棺は地中に埋められていく。

葬儀が滞りなく終えると、ホレイシヨはナディアたちに声をかけた。ナディアが代表してホレイシヨに礼を述べる。

「これまでいろいろとありがとうございます。何てお礼を言ったらいいのか…」

「そこまで礼を述べられても。ところで、ウエスト博士が君に遺産を相続するとメッセージを残してきたが…」

「実母と異父妹を不幸にした人からの遺産なんていりません。それよりも寧ろ、被害者に宛てるべきです」

「それなら相続放棄の手続きをとるといい。博士は悪魔に魂を売り渡しても、良心は残っているはず。俺はその良心を信じたい」

「思えば、ベツキーを救いたために敢えて危ない橋を渡ってきた。その苦勞が報われることを思うと、何だか嬉しくて」

「そうか、よかった。これから裁判で証言してもらうことになるが、大丈夫か？」

「大丈夫。私には味方してくれる人たちがいるから」  
「それは心強い」

ホレイシヨが握手を求めると、ナディアは応えた。

「ゴドノフさん、ナディアとレベツカを頼む」

「承知しました、ケイン警部補」

ゴドノフに握手を求めると、それに応えた。

「それでは裁判所でお会いしましょう」

3人がホレイシヨに別れを告げてからその場を去ると、テレビカメラがホレイシヨを追いかけてきた。

「ケイン警部補」

腐れ縁のエリカ・サイクスがマイクを持ってやってくると、ホレイシヨは「カメラを止める」とカメラマンに強く言った。

「グラシア・コスメティック社を潰すためにいろいろと取材してい

るようだが、裁判の邪魔立てをすると容赦はしない。それより『ロサスル』を使い続ける人たちに即刻中止してもらうような報道を行え」

サングラスをかけて、ホレイシヨはその場を去った。

## 第12話 残された良心（後書き）

注：俳優組合のこと

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8037e/>

---

CSI:マイアミ 青い薔薇

2010年10月8日11時40分発行